

紀伊國屋書店からの再スタート

田辺茂一との出会い

これまで見てきたように、前川國男の名は、戦争が敗戦に終わり、厳しい戦後を迎えた時点では、戦前からのコンペを中心とする精力的な設計活動と建築雑誌による発言を通じて、もちろん建築界では広く知られていた。それでも、大学や大きな組織に席を置く公的な立場ではなく、在野の一建築家に過ぎなかった前川は、職能としての建築家像が定かではなかった時代に、どの程度世間的に認知されていたのか、と考えるとき、実はほとんど無名に等しかったのではなかろうか。そこには、不運にも、一九三五年の独立直後に始まった日中戦争から太平洋戦争へと続く中で、木造バラックしか建てられず、誰もが知るような本格的な建築を手がける機会を一度も持てなかった不自由な状況も立

ちはだかっていた。また、だからこそ、前川は、あらゆる手立てを尽くして、仕事を得るための苦戦を強いられたのだ。それでも、戦時下に、「バラックをつくる人はバラックをつくりながら、工場をつくる人は工場をつくりながら、ただ誠実に全環境に目を注げ」と呼びかけた前川の思いは、人とのつながりを育む無言の力を彼の建築に与えたのだろう。敗戦直後の紀伊國屋書店創業者の田辺茂一との出会いは、そうした文脈からとらえることができるように思う。それは、戦時下に建てられた小さな木造住宅がもたらした奇遇の縁とでもいえるものだった。後年、田辺は、前川との出会いについて、次のような回想を残している。

「ようやく新宿の町並みも復興の兆しが見え始めた昭和二十二年のある日、私は友人戸沢民子さんと野口謙二郎氏

(野口弥太郎の令弟)を南平台の邸に訪ねたが、その邸の建築の、豪壮、そして茫洋さが気に入った。設計建築の名をたずねると、前川國男氏であった。いつまでも終戦後のバラック建てでは仕方がない。幸い父の残してくれた炭屋の納屋跡の地所が五百余坪あった。長方形であった。私は前川さんを訪ねた。こちらの資金もなかったが、建築資材もまだ充分でなかった頃である。私は前川さんに一切をお願いした。そしてめでたく、昭和二十二年五月二十三日、復興第一歩の、花崗岩と木材を配した、新しい型の書店が誕生した。店内に、パリから帰朝の荻須高德の五〇号の油絵など飾った。」

この出会いまでにはさらに長い前史があった。田辺が、父が家業として営んでいた薪炭問屋の敷地内の空き地に書店を開業したのは一九二七年一月二十二日、二十一歳の若さのときだった。この初代の建物は、田辺が自ら設計して近所の大工に頼み、二階には画廊を設けていた。開業の背景には、一九一五年の大正天皇御大典の日、父に連れられて立ち寄った日本橋の丸善の二階で、金文字の光り輝く洋書の本棚に心を奪われ、「本屋に成ろうと決心させた」十歳のときの経験があったという。余談だが、彼の人生を決定づけた丸善とは、日本初の架構式鉄骨造四階建て、エレベーター付の偉容を誇る赤レンガづくりの近代的なビルで

あり、一九一〇年に竣工したばかりだった。また、その設計者は、前川とは因縁の深い、当時は東京帝国大学助教の佐野利器である。その後、開業した紀伊國屋書店は、建て増して順調な営業を続けたが、太平洋戦争末期の一九四五年五月二十五日に東京を襲った米軍の焼夷弾による空爆によって全焼してしまふ。それでも、次のような出来事に田辺は励まされる。

「罹災後、私は荻窪の借家から、一日隔きぐらいに新宿の焼跡にでかけた。戦局の帰趨はどうなるのかわからない。

(…)この際、やめてしまふか、それとも、と私は思案の日々であった。ある日、元店員の一人が、戦地から戻ってきた。そして云った。「店を廃めるなんて、惜しいですよ、遠いシベリアでも、軍隊の仲間たちは、店の名を知っていましたからね……」その言葉で、やっと私は決心した。」

奮起した田辺は、早くも敗戦直後の一九四六年十月、跡地にバラックを建てて書店を再開する。おそらく、その頃のことだったのだろう。田辺は、このような再建への思いを抱いていたからこそ、偶然訪れた野口邸に書店の将来像を重ね合わせたに違いない。残念ながら、紀伊國屋書店が全焼した同じ空襲で銀座の事務所を焼失させた前川事務所には、野口邸の凶面類などは残っていない。また雑誌にも掲載されなかった。唯一、戦後にまとめられた前川事務所



野口謙二郎邸（1942年）写真提供・吉川清

の作品目録の一九四一年の欄に、「野口邸第一案（崎谷）」とだけ記載されている。このことから、基本設計は、崎谷小三郎が担当したのだと思われる。また、現場を担当した吉川清の回想録⁽¹⁰⁾の記述からは、一九四二年に竣工したことが確認できる。ここに掲載するのは、吉川が大切に所蔵していた小さな写真のコピーである。これを見ると、同年に崎谷の担当で竣工する前川國男自邸と同じく、建築資材統制による木造三〇坪制限下の簡素な建物だったことがわかる。それでも、一階を後退させて丸柱を露出させ、二階の

角にL形のコーナー窓を設けるなど、水平線を強調したモダンな外観にまとめられていた。仮設のバラックで書店を再開した直後の田辺にとって、それは新鮮な印象を残したのだろう。

紀伊國屋書店に込められていたもの

こうして、先行きが見えない中でプレモスに取り組んでいた最中に、木造とはいえ、本格的な新築の仕事を得たことは、どれほど事務所に明るさと希望をもたらしたことだ



紀伊國屋書店（1947年）正面外観*



正面玄関ポーチ*

ろう。前川にとって、この仕事は、戦前の独立後の第一作である森永キャンデーストア銀座売店（一九三五年）や、コンペの入賞作で唯一実現した同じ銀座の明治製菓銀座売店（一九三三年）以来の誰もが身近に接する街角の建築であり、さぞかしやりがいを感じたに違いない。竣工後、粗末なザラ紙で発行された『新建築』に、設計担当者の寺島幸太郎は、次のような設計意図を書き留めている。

「敗戦後の焦土の中で、都市生活者は食糧の欠乏と文化の荒廃とに悩みつつも、きびしい生活苦と闘って居るのであ

る。せめて精神的な飢餓からは脱れたいと願う学生や知識層の欲求にこたえ、また一方には文化国家の建設の第一歩を踏み出したいと云う書店経営者の熱意の下に、この建築は計画された。求むる良書がいつでも書棚に発見出来る豊富な書籍を有つ店舗、また蔵書を焼失した愛書家には街の書庫として親しまれる書店を創ることに努力した。」

ここには、田辺の、次のような「街の書店」に対する希望も託されていたのだろう。

「本屋というものは、ただ読者に本を売るということだけではなく、（…）少くとも、喧騒な街中の、唯一の学問の緑地帯として、一般の文化的雰囲気の醸成に、大いに努めなければならぬものだろう。」⁽¹⁰⁾

だが、こうした設計意図と田辺の希望を実現するために必要な建設技術は、戦時体制下の軍の支配による建設業界の疲弊と敗戦後の進駐軍発注工事による混乱によって、大きく損なわれてしまっていたのである。そのことについては、『建築雑誌』のこの建物に対する批評文に記された、「施工の拙劣さ⁽¹¹⁾に関しては相当検討を要する事であり許しがたい事実である」という厳しい指摘からもうかがえる。



店内2階から1階売り場を見下ろす*



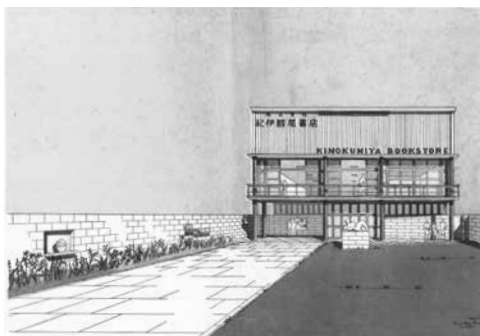
2階ギャラリー 柱は北山杉の床柱を転用したもの。正面に荻須高徳の絵が見える。以上4点、撮影/渡辺義雄*

りませんでした。⁽¹⁾
 しかし、この紀伊國屋書店の、前川と戦前から交友のあった写真家の渡辺義雄によって撮影された竣工写真からは、敗戦からわずか二年足らずで建てられたとは思えない、清新な明るさが伝わってくる。竣工当時、新宿通

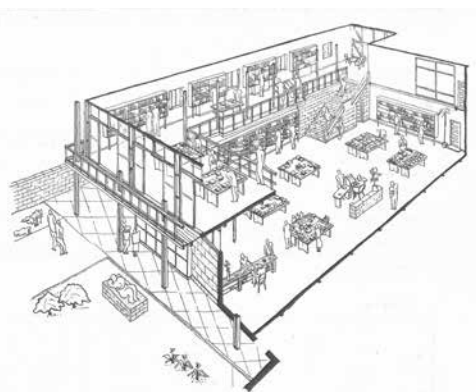
また、同じく寺島が書き留めた次の文章からも、深刻な事態に陥っていた当時の建築界の状況が伝わってくる。「現場にて痛感したことは、資材難もさること乍ら、荒廃したのは國土計りではなく、建築技術も亦無惨に荒廃して了っていたことであつた。戦時中の建築工短期養成の報いは今や二十代、三十代の若い職人には、おっつけ仕事ではないほんとの仕事が出来ないという当然乍ら悲しむべき結果となつて表れている。(…)今こそ建築技術再興の方法が真剣に考えられなければならぬ時期であらう。」⁽²⁾

戦争は壊滅的な打撃を建築界に及ぼしたのである。けれども、ここで寺島が指摘した「建築技術再興」という課題こそ、これに続く一九五〇年代に、前川と所員たちが取り組んでいくことになる、工業化素材と構法の開発を通じた確かな建築技術の育成をテーマとする、「テクニカル・アプローチ」と呼ばれる方法へとつながるものだった。また、はるか後年だが、三〇年後の一九七七年に発行された紀伊國屋書店創業五〇年記念誌に寄せた文章には、前川自身による苦勞話のエピソードも記されている。

「当時の建築業界は未だ資材の不自由は当然のことでした。室内に立つ柱は電信柱か何かを削って作る筈だったのですがそんな資材は却々揃いません。やむを得ず御座敷用の磨き丸太をさがして来て、これを室内の丸柱として間に合わせるといった有様で、塗装用のペンキもよい油がないので、魚油を使わねばなりませんでした。」⁽³⁾



外観透視図 MID 編『前川國男建築事務所作品集』工学図書
出版社 1947年より転載



内観透視図 同上

とは隔絶した生々しい状態だったからだと理解するほうが、より正確なのだろう。

そこに実現された空間の質

それでは、田辺の希望に比べて、前川たちが求めたのはどのような空間だったのだろうか。作品集に掲載された外観と内観の透視図がそのことを明快なかたちで示している。興味深いのは、戦前の丹下健三が担当した岸記念体育会館（一九四〇年）の逆さ折り屋根による正面性を強調したファサードの形

りを挟んだ斜向かいには、テキヤの尾津組が新宿マーケットと呼ばれた闇市を不法に開設し、食うや食わずの半ば飢餓状態で食料と生活用品を求めにやってきた人々の群れで、あたりは騒然としていたはずだ。にもかかわらず、この渡辺の写真には、目の前の苛酷な光景とは無縁な、落ち着きと静謐な雰囲気の写真が撮られている。逆に言えば、前川が生前に出版した唯一の作品集に掲載されたカラーの透視図に周囲の街の様子は描かれておらず、渡辺の写真にも写っていないのは、むしろ、現実の街の姿が、紀伊國屋書店

式を踏襲しながらも、それとは異なり、大谷石の壁を用いて緩やかに前庭を囲いながら、玄関ポーチへと来客をごく自然なかたちで流れるように導き入れていることだ。そこには、前川國男自邸と在盤谷日本文化会館コンペ案（一九四三年）で獲得された設計方法論、すなわち、内部空間と外部空間、さらにその外に広がる環境的空間が織りなす「全体的空間構成」が自覚的に試みられたのだと思う。さらに、店内に入ると、ポッカーリと吹き抜けの大きな明るい空間が現れ、二階へと歩むにつれて次々と展開する悦楽の



1950年代後半の紀伊國屋書店 撮影／宮嶋関夫
『建築』1964年5月号より転載

ような空間体験が用意されていることである。これもまた、前川國男自邸から継承されたものに違いない。こうして、紀伊國屋書店には、戦時下の前川が発見し、浜口隆一が、在盤谷日本文化会館コンペの前川案の特質としての確に見抜いた、「行為的・空間的なもの」、「すべて伸びやかであり、明るく、快適である。一言で言えば人間の『空間』が、実現されているのである。そのことは、この空間を体験した人々の記憶に息づいていた。

やや後年だが、一九五〇年代後半に編集者の宮嶋関夫が撮影したスナップ写真には、両側に小さな木造バラックの商店が建ち並ぶ狭い路地の先にある、紀伊國屋書店の等身

大の姿が記録されている。また、同じころの出来事として、田辺はあるエッセイ集の中で、次のようなエピソードを紹介している。それは、紀伊國屋書店を久しぶりに訪れた若い大学教授の「新婚早々の綺麗な令夫人」が、名古屋大学仏文科で学んでいた学生時代に、恩師が語ったという次のような発言を紹介し、それを思い出して立ち寄ったのだという。

「皆さん、東京へ行ったら、一度是非、新宿のK書店へ行って御覧なさい。コルビジェ風の建物を、大谷石の階段を二階へ上がると、洋書部がある。美しいフランス綴じのガリマールの新刊や、バレエの写真や、さてはブラックやマチスの画集を掲げてきて、そのあとひとときの憩いを、書店の前にある、白いテラスにいらっしやい。三岸、猪熊、岡田、荻須、野口、児島、そんな人達の絵が壁にあって静かに珈琲を飲んでいると、ほんとうにフランスを感じますよ……」⁽¹⁰⁾

そして、やはり同じころに、姉に連れられて紀伊國屋書店を訪れた一人の少年は、次のような印象を受け取っていた。

「中学生になったばかりであったから、一九五四年頃であろうか。ピアノのレッスンに通う姉に連れられて信州の田舎から上京した私が、東京で初めて知ったのが秋葉原商店

街と新宿の紀伊國屋であった。犬屋やプロマイド屋の並ぶ路地を入れてゆくと、突然大きな吹き抜けの空間があらわれ、その下にびっしりと図書館のように本が並んでいた。街道に面して雑誌の並ぶ駄菓子屋のような本屋しか知らなかった私にとって、あの大谷石の壁と木造大架構のオープンな空間で本に囲まれていると、私は心地良さに軽く酔い、妙に気分が昂揚するのを意識していた。あの空間は、自分の想像していた東京という都会の空間を通り越して、ヨーロッパまで私を連れていった。⁽¹⁹⁾

この一人の少年は、後に建築家として活躍する伊東豊雄である。紀伊國屋書店は、前川にとって、紛れもなく、プレモスと同じく、戦後の再スタートを飾る建築だった。